

詩人の童話を読む

担当講師 岡野 絵里子 (詩人)

マッチ売りの詩人

野尻 民子

昨年、児童文学のノーベル賞と呼ばれる国際アンデルセン賞《作家賞》を受賞した上橋菜穂子の作品を絶賛して、「バカの壁」でおなじみの養老孟司がこう語った。「優れた作品は、しばしば子供向けのふりをする」。

そう。この歳をして『詩人の童話』を受講する愉しさもそこにある。生きた言葉を、ほんとうに清らかな水を湛えた深くて暗い井戸から見事に汲み上げる達人。そうした詩人ならではの「詩と童話」が、思わぬ広がりとお深さを見せて読み解かれる醍醐味。これは病みつきになる。

売れないマッチをかかえて、あまりの寒さに自分を暖めようとマッチをすり続け、優しかった祖母の光あふれる幻影に抱かれて天国に昇った少女……。アンデルセンの「マッチ売りの少女」を読み終えると、若くして逝った宮澤賢治と新美南吉が思い浮んだ。

賢治37年、南吉29年の生涯に与えられた試練は、せつなくも

厳しかった。それなのに、書き残された詩や童話は神々しいぬくもりを帯びている。その余韻が鳴りやまない鐘のように、いつまでも心に響く。私達をほのかに灯し続けて。

赤い鳥

細田傳造

おじいさんてうるさい。こども相手にまじめにうるさい。室内。ピンポン玉野球にむちゅうになつてぼくを相手にうるさい。スイング肩にチカラ肘ハツテ振れナガスなbruntなんて狙うな刺され白球天窓に偽海賊キューと啼いたよ欄間神棚お狐様ふつとんで散つて消えても気にすんな極東のおじいさんのこのちいさな家なんか気にすんなドンマイドンマイ原生林になつた原初の鳥がとぶオーケーバッターかわりまして爺ハイクイけつ。鯨蝶々しびんしびんと跳ねてとぶトンダ爺走れトシヨリ滑れ転べ死ねいいしあいしてるねおれたち爺もつとハイクして空空空空に流れし虚空かなうーんだだだねアウト爺三振アウト死ね

おじいさんてうるさい。こどものぼくを相手にまじめに野球のゲームをしてくれる。おじいさんはむかしむかしぼくらいのこどもだったころアメリカからきた野球のチームを見ました。日本の水牛団と試合するのを見ました。あれから野球が好きになつてアメリカの野球を思い出してぼくを相手にうるさい

い。
赤い鳥だよわいるどだよワールドだよ神黒き森におわしまし
て水牛にとまりし鳥の赤し赤い鳥だよセントルイスだよカージ
ナルスだよ。
じいちゃんすこしはなしへんだよ赤い鳥のはなし。こらしめ
てぶらすちつくのバットで爺さんのお尻ぺんぺん。もうピンポ
ン野球であそんでやんないっ。

